

石川県白山自然保護センター編集

はくさん

第15巻 第4号



尾口村瀬戸の御鍋^{おなべ}

加賀禅定道沿いの御手水所^{みでずどころ}の一つとして古くから知られてきたのがこの“御鍋”です。これは、岩の一部分に穴ができて、そこに水がたまるようになったもので、かつては、白山の遙拝者^{まえばいしや}がここで身を清めたといわれています。この御手水鉢は干ばつの際にも水は枯れず、豪雨にも水はあふれることなく、常に一定量の水を保っていたといわれています。この水を理由なくかきまぜると、翌日は必ず雨になると伝えられています。



白山の クマタカ

イヌワシと比較した
分布と行動圏

上馬康生

白山自然保護センターでは、環境庁からの委託を受けて白山地域でイヌワシとクマタカの調査を行っています。どちらも日本の山に住む留鳥としては、最大級で最強のワシタカ類で、山の自然の中では頂点に位置し、怖いもの知らずの存在です。ところが人間の諸活動には勝てず、開発が進み、すみやすい自然環境が減少しつつある今日、全国的に数が少なく、その将来が心配される鳥です。

県鳥イヌワシについては、中宮展示館のイヌワシコーナーや出版物でいろいろ紹介してきましたので、ある程度のことはおわかりいただいていると思います。それでは、今まで白山ではほとんど未知の状態にあったクマタカについて、ここ2～3年の調査で明らかになりつつあるその生態についてお話ししましょう。

クマタカとはどんな鳥

はじめに、野外で出会った時のクマタカの体の特徴についてみておきましょう。山の中で見られる大型のワシタカ類で、まちがえる可能性の高いと思われる3種の、体長（嘴の先から尾の先までの長さ）と翼開長（翼を開いた時の両翼の端から端までの長さ）を比較したのが表です。体長はイヌワシとトビの中間の大きさがあるものの、翼開長はトビとあまり異なりません。空を飛んでいる時には体長より翼の長さのほうが目につきます。また普通は空高く飛んでいる小さな姿を見るので、この程度の差はほとんど区別できません。しかし他のワシタカ類で白山で普通に見られるものはずっと小さいので、これら3種とは

	体 長	翼 開 長
クマタカ	雄72cm, 雌80cm	140 cm ~ 165 cm
イヌワシ	雄81cm, 雌89cm	170 cm ~ 213 cm
トビ	雄58.5cm, 雌68.5cm	157 cm ~ 162 cm

ワシタカ類3種の体長比較
(フィールドガイド日本の野鳥 ー日本野鳥の会ーより)

区別できるでしょう。それではどのようにして識別すればよいのかといいますと、まず尾の先が丸くなく、まっすぐか内部に切れ込んでおればトビです。翼の色が分れば、イヌワシは最も黒く見え、クマタカは全体に白っぽく見え、条件がよければ横しまがわかります。そして翼の形は幅広く長いイヌワシと、細くて途中で折れ曲がった感じのことが多いトビに対して、クマタカは幅広く後縁が丸くふくらんでいる感じがします。

分布と数

イヌワシは県中南部の山地に広く分布し、約20か所に合計40~50羽が生息していることがわかっています。ところが、今までイヌワシが見つかったところでは、クマタカはほとんどといってよいくらい見られなかったのです。イヌワシだけを調べていた頃は、クマタカは石川県にはイヌワシよりも数が少なく、ごくわずかししか生息していないのではないかと思ったりもしていました。というのも、石川県以外ではどちらも同じところに生息しているのを、いくつか知っていたからです。また森林の鳥といわれるクマタカなので、いてもほとんど目につかないだけなのかと思ったりしていました。ところがこの調査が始まって、以前にクマタカが見られたところを詳しく調べ出すと、見られる回数は少なく、イヌワシに比べると、やはり飛んでいるのを見る時間は短いものの、次から次へと発見できるようになりました。2年間で、それぞれ別のつがいか、別の個体と考えられるクマタカが15か所で見つかりました。調査したのは白山地域の限られた範囲なので、おそらく県内全体では、イヌワシよりはるかに多い数になるものと予想しています。

おもしろいことに、今度はクマタカが見られたところには、イヌワシはほとんど現れてこないのです。図-1は昭和60年4

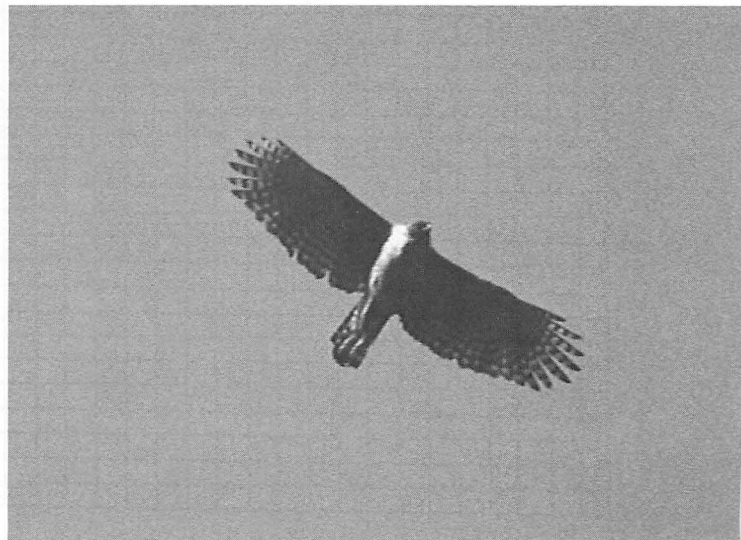


写真2 飛んでいるクマタカ

月から昭和62年1月までの間に、白山地域で記録できたこれら2つの鳥の分布を約1 km×1 kmのメッシュで表してあります。クマタカのみ確認は40メッシュ、イヌワシのみ確認が76メッシュあり、両種とも見つかったのは10メッシュです。図でもわかるように両種の確認できた場所は、かなりはっきりと別れており、その境付近でどちらも見られています。白山地域ではイヌワシとクマタカはすみ分けているのです。イヌワシは図のおおむね右側の部分に、クマタカは左側の部分に分布しています。この地域の標高は、左上方が低く、右下方が高くなっており、クマタカはより低標高地に、イヌワシはより高標高地に分布しているといえます。

このようなすみ分けは、まだ全国どこからも報告されていません。石川県以外の生息状況を見ると、その原因が単に標高だけによるものとも考えられません。分布の要因が何に関係しているのか、今後は、植生・地形・人為等の環境の分析や、両種の餌の種類、その割合、狩りの方法のちがいを検討して明らかにしていきたいと思っています。

行動圏の広さ

クマタカの行動を望遠鏡や双眼鏡を使って追跡し、飛行コースや止っていた場所を地図に記入する方法で記録を集め、それらをまとめて一つがいが行動している範囲を明らかにしました(図-2)。直線は滑空飛行、らせん形は旋回飛行、点はその場所で止っていたことを示しています。調査1回ごとの記録はごくわずかなので、これも昭和60年4月から昭和

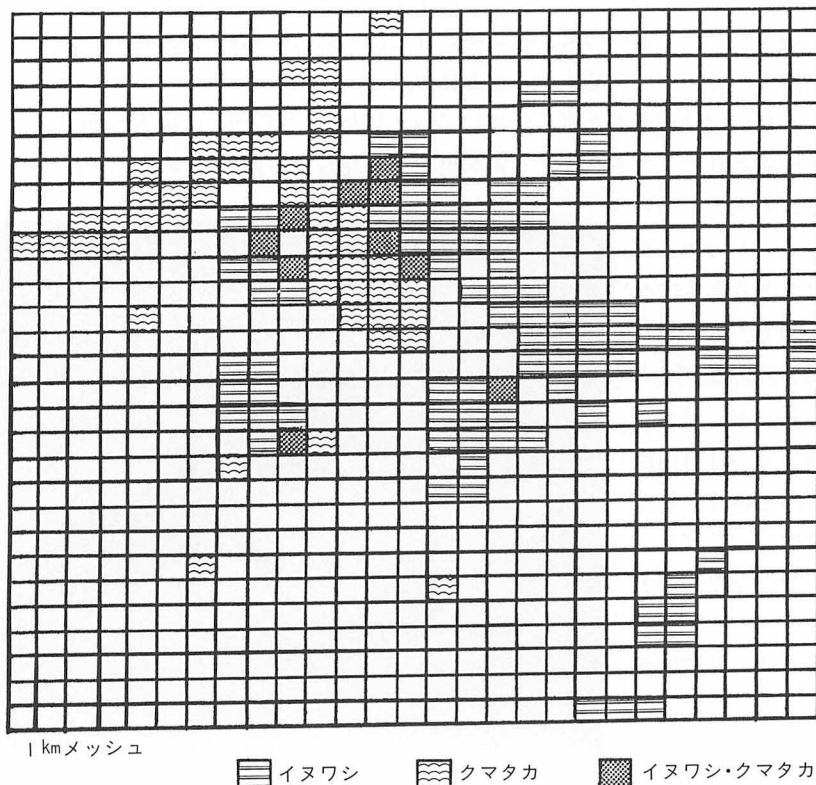
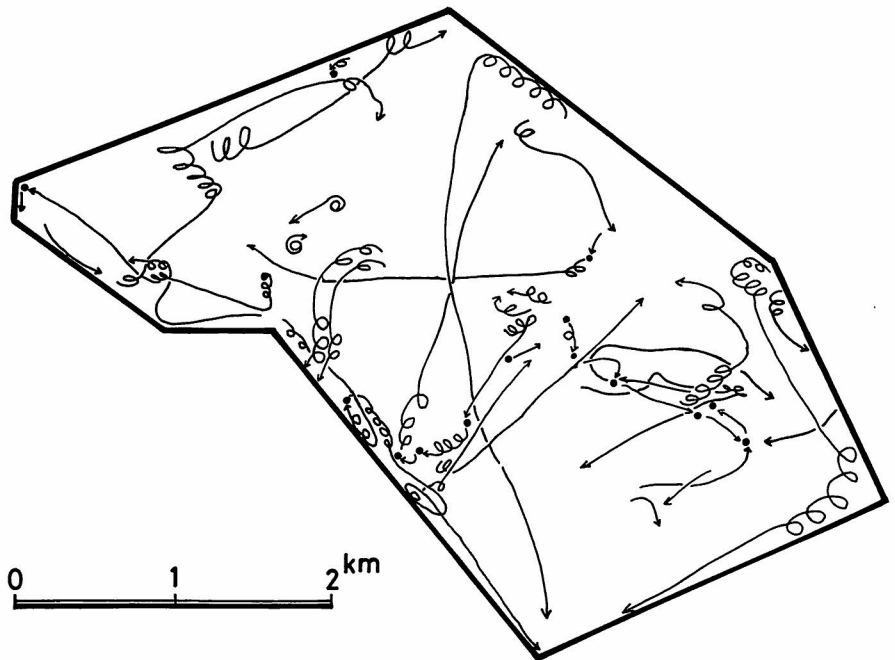


図1
白山地域におけるイヌワシとクマタカの記録メッシュ

図2
白山地域におけるク
マタカーつがいの行
動圏



和62年1月までの記録を合せてあります。記録できた飛行コースの外まわりを結んだ多角形で行動圏を表しました。その一辺は、主稜線またはそれより派生している稜線と一致しているようでした。つまり、稜線で囲まれた谷を行動圏としているのです。その面積を計算すると約11km²となりました。これはこのつがいの最低限の値で、今後の調査でまだ広がる可能性は残されていますが、隣接地域に他のクマタカのつがいやイヌワシのつがいの生息していることも同時にわかりましたので、あまり面積は増えないと考えられます。なお現在、別のつがいで行動圏を調べていますが、この数値よりも少ないようです。

これを、同じ方法で以前に明らかにした白山地域のイヌワシの行動圏の面積と比較すると、イヌワシが少なくとも17~31km²あるのと比べ小さな値となっています。また石川県以外で調べられたクマタカの行動圏の面積と比較すると、奈良県の紀伊山地の35~48km² (菊田 1984)、滋賀県の鈴鹿山脈の約21km² (山崎 1986)、京都府の丹波山地の13.3km²~18.5km² (須藤 1985) などよりずいぶん狭くなっています。このような、他の地域と比較して狭い傾向が、白山地域のどのクマタカについてもいえることなのかどうかを調べると共に、その原因を、生息環境の条件を他の地域と比較することによって明らかにできないものかと思っています。

少しずつわかりかけてきたクマタカの生態ですが、営巣活動に関する様々な行動や餌の種類や量など、多くの研究課題が残されています。今後明らかにして、また紹介していく予定です。
(白山自然保護センター)

白山のササ群落

古池博

三ノ峰の南斜面、小屋（三ノ峰避難小屋）周辺から手前にかけてササの群落 distributes.

植生の非対称配列とササ群落

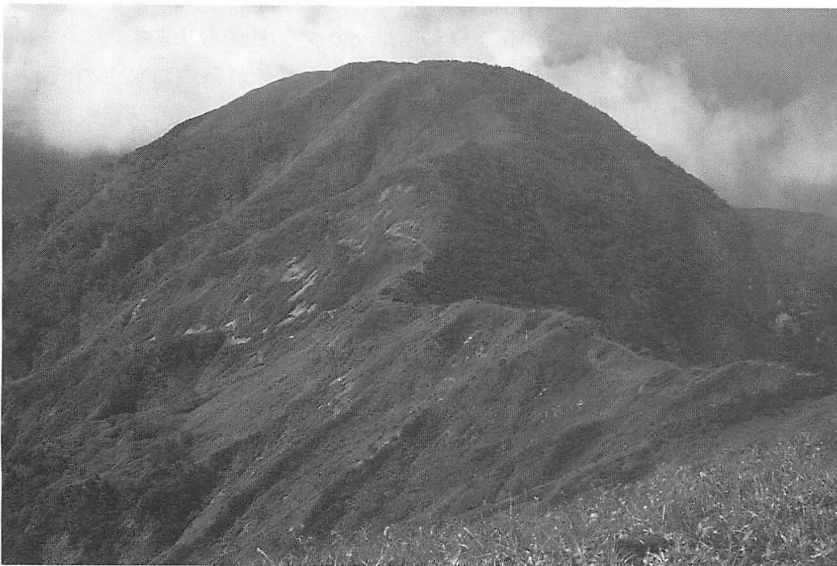
石徹白(岐阜県白鳥町)からの白山登山道は昔からの美濃禅定道です。石徹白川左岸側から有名な石徹白大杉の横を通り尾根伝いにのぼっていくとほぼ、標高1500mあたりで勾配がゆるやかになり、チシマザサ群落の広がりの中に、ブナの疎林が散在しているといった景観が開けます。ここから見える銚子ヶ峰(1810.4m)の南斜面は広くササ群落に被われていることがよくわかります。ふたたび、ブナやダケカンバの茂みのなかの急な坂道を登りつめると、やがて神鳩ノ宮避難小屋をへて稜線に出ます。ここからは、銚子ヶ峰、一ノ峰(1839m)、二ノ峰(1962.3m)、三ノ峰(2128m)と登り降りを通りながら次第に高度を増していきますが、鞍部にはダケカンバなどの高木が稀に見られるものの全体として、低木林特にチシマザサ群落が優占して眺望に優れた尾根道が延々と続きます。

さて、銚子ヶ峰の南東尾根から石徹白方面を振り返るとまことにすばらしい眺めですが、神鳩ノ宮避難小屋を右に見るように東南東方向を観察すると、興味深い植生配列が見られます。すなわち、そこには丸山(1786.0m)、芦倉山(1716.7m)、大日ヶ岳(1708.9m)とつづく稜線が延びているのですが、どの山についても南西斜面にはササ群落が頂上より下に向かって広がり、北東斜面には頂上付近までブナ林(まれにダケカンバ)に被われていることが認められるのです。

ブナ林の上限付近（冷温帯落葉広葉樹林帯上限付近）で見られる、このような植生配列の非対称性は石徹白登山道で繰り返し確認できます。三ノ峰の避難小屋を過ぎて頂上付近から、二ノ峰方向を観察したり別山（2399.4m）頂上付近から三ノ峰方向を観察すれば、北西側斜面ではオオシラビソ林やダケカンバ林が稜線まで這上がっているのに、南東斜面上部ではササ群落が発達していることが確かめられます。つまり、植生の非対称配列は亜高山針葉樹林帯でも引続き共通の現象ということが出来ます。白山では標高2100mを越えるとオオシラビソ林・ダケカンバ林がハイマツ低木林・ミヤマハンノキ低木林などと交替し始め、2400mあたりで高山帯になります。高山帯ではササ群落の勢力は弱くなりますが別山平、弥陀ヶ原、御前峰南西斜面など南向きの斜面ではハイマツ低木林の上部に隣接して低いササ群落が形成されている事があります。白山の高山帯では、亜高山帯と同様に東側斜面は急斜面ないし崖となって落ちこんでいます。ハイマツ低木林の発達は尾根付近に限られ、比較的緩やかな斜面をしめるササ群落や雪田群落とならんで、急斜面は高茎草原、裸地（荒原）、雪田などが占めています。

以上のような観察から、南北に走る白山山系がブナクラス域（冷温帯落葉広葉樹林帯）上限付近からハイマツ群団域（高山帯）にいたる約1000mの範囲ではっきりとした植生配列の非対称性を、北西－南東軸を中心として発達させていることが確認できます。そしてすでにのべた通り、ササ群落の生態分布がその植生配列をつくるうえで重要な役割を果たしているのです。

言うまでもないことですが、ササ群落が亜高山帯の南側斜面に発達するのは、別山以南とはかぎりません。油坂の途中や、南竜ヶ馬場のキャンプ場から、万才谷から東の山姥谷にかけての南斜面を観察すると、枝尾根のひとつひとつについて、西向きの斜面はオオシラビソ林に、東向きの斜面はササ群落におおわれていることがわかります。観光新道を行けば、殿が池付近をはじめこの道の通る尾根自体がそのような植生配列を持っていることが確かめられます。そこから見える、釈迦岳の南東斜面も大きなササ群落が占めています。北のほうでは、四塚山（2519.5m）から北にのびる尾根の南西ないし東側斜面は大きなサ



別山平（北北東方向）からみた三ノ峰。左側（東向き）斜面がササ群落、右側（北西）斜面には森林が這上がっている。

サ群落や雪田群落がおおっているのにたいして、その反対側斜面や、逆に滝川（百四丈滝をつくり丸石谷を流れて尾添川にそそぐ支流）をへだてた清浄ヶ原（北西に面した斜面）では尾根筋までハイマツ低木林やオオシラビソ林あるいはダケカンバ林などが占めています。かなり標高が低くなりますが、奈良岳（1644.3m）から大笠山にむかう登山道から、奈良岳の南東斜面を見るとササ群落がこれを一面に被っていることがよくわかります。また、大笠山（1821.8m）から笈岳（1841.4m）の方向を観察すると大笠山頂上から南西斜面にあたる千丈平にかけて広くササ群落がひろがっています。

このようなササ群落は別山の三ノ峰から西にむかい、赤兎山（1629m）をへて大日山（1368m）に延びる稜線や南斜面にも広く見られます。

組成と立地

白山山系の自然植生としてのササ群落は大きく2つの類型に分けることができます。

(1) 背丈の高い型

オクノカンスゲ・チシマザサ群落にあたりと考えられるもので、ブナクラス域の上限付近から亜高山帯のササ群落の大部分がこの型に入ります。高さが2.0m～1.5m程度の群落でチシマザサが密集しています。第1層（低木層）を構成するチシマザサの幹は太く、生育状態は極めて良好です。第2層（草本層＝林床）は貧弱でオクノカンスゲを伴うことが多いので、これが標徴種になっています。

おもに、緩やかな山頂付近から南東斜面側にかけてのやや安定した場所に発達します。白山山系では、この斜面は大勢として冬の季節風では風背側、夏の季節風では風衝側にあたりと考えられます。土壌は腐植質に富み、雪解けの時期は水分が多く、夏にはかなり乾燥するようです。

風衝地ではチシマザサの階層やその上にやや突き出たかたちで、キャラボクが入っていることがしばしばです。そのほか、アカミノイヌツゲなどもみられることがあります。斜面では、ヤハズハンノキ、ミズキが加わることがあります。

林床も環境によって多少の差があり、オクノカンスゲのほかマイヅルソウ、ゴゼンタチバナ、バイカオウレン、ツルアリドウシ、ショウジョウバカマなどがあります。

なお、背丈の高い型にはこのほか、ブナ林の限界付近でチシマザサ群落内にブナの低木・若木が小斑や疎林をなして侵入しているところがあります。この場合には群落組成は典型的なオクノカンスゲ・チシマザサ群落のそれから偏り、チシマザサのなかに、オオカメノキ、ツノハシバミ、エゾユズリハ、タムシバなどブナ林の低木層の構成種を含んでいます。

(2) 背丈の低い型

これは、亜高山帯、高山帯に形成されるもので、山頂部付近で日当たりが良く乾燥しやすい南向き風衝地に見られ、背丈は50cm～10cm程度です。しばしば、ハイマツ群落に隣接してひろがっていて、ミヤマヌカボなどの生えている荒原に接続することがあります。特に背丈の低いものでは階層が2つに区別しにくい場合もあります。

この型を構成するササの種類には少し問題があります。従来はチシマザサとされてきたのですが、幹は細く株立ちのようすはチマキザサにとっても似ています。葉鞘の先端につく肩毛が発達していたり、開花していたりして確かにチマキザサであることが確かめられる場合もありますが、そのような証拠のないものも多く判断が難しい場合が少なくありませ

ん。なお、ササ類の同定に重要な毛は時期が過ぎると脱落する性質があるのでいっそう厄介です。

この群落に似たものをあげるとすれば富山県の植物研究者たちが立山の弥陀ヶ原などで記録しているマルバウスゴーチシマザサ群落でしょう。この場合もチマキザサが主力ですが、チシマザサのこともあるそうです。

ササのほかは、ハイマツ、ウラジロハナヒリノキ、クロマメノキ、コケモモなどの低木が入ることがあります。草本ではコバイケイソウ、ニッコウキスゲ、ミヤマヌカボなどや草丈の高いものからバイカオウレン、マイヅルソウなど環境によって多少の差があります。

白山では分布地は三ノ峰、別山平、弥陀ヶ原、などです。

環境と生態

南竜ヶ馬場から別山への登り口にあたる赤谷の右岸側から、油坂より右より（西側）を観察するとよくわかるのですが、ここには何条もの小渓流（ガリー）が流れ下っています。小渓流の谷底や赤谷との合流点などには碎屑物の堆積が見られますが、この堆積地に発達しているのは高茎草原です。全体として、赤谷の左岸側は北西斜面で高茎草原が優占し、逆に右岸側は南東斜面でササ群落になっています。これは日射や乾燥がササ群落をもたらし、水分の供給が高茎草原の成立に必要なことを示唆しています。多くの場合、高茎草原を両岸に配列する小渓流の間にはさまれた尾根筋はササ群落、あるいはササを林床にもつオオシラビソ林などに被われていることが多いのです。高茎草原の形成される場所は急勾配で侵食が活発で、土砂の移動の比較的激しい、水分の供給にめぐまれた湿潤な環境です。反対にササ群



斜面に発達するチシマザサの群落
(市兵衛茶屋跡からの登りの斜面周辺)

落のできる場所は日当たりが良く、乾燥していて土砂も比較的安定しています。このことは、黒ボコ岩の少し手前で観光新道から砂防新道側を観察してもよくわかります。砂防新道は、大きな崩壊地を横切っており、その崩壊地に高茎草原が形成されているのです。

白山の高山帯・亜高山帯には高茎草原の発達が著しいとされ、その原因は多雪によるものと理解されてきました。確かに多雪は水分の豊かな供給源であり、大量の流水・地下水の供給と雪崩によって、侵食と崩壊を促進します。多分、それに加えて、火山であることが、侵食・崩壊が激しいことに寄与していると思われます。

しかし、このことは白山山系でササ群落が占めている重要な地位を覆すものではありません。ササ群落が発達しているのは高茎草原の立地する環境とはちょうど反対です。勾配は比較的ゆるやかで、日当たりがよく乾燥しがちな環境です。多くの場合、冬の季節風の風

背側で雪庇のできる側にあたります。しかし、雪は比較的早い時期に、滑落してしまいササは早くから日光を浴びることができます。

1986年の5月の連休（5月3日）に観光新道の市兵衛茶屋跡付近から尾根の平坦面にかけての間で私は面白い観察をしました。この日、吹き付ける南風と強い日射、上昇する気温によってゆるんだ積雪が、昼ごろになるとチシマザサ群落の上を滑らかに滑り落ちていくのです。斜面の積雪下のチシマザサ群落は横倒しになってちょうど、すだれ（簾）を敷き詰めたようになっていました。雪が落ちていきますと、チシマザサは身軽になったものから、次々にぴんと立ち上がっていくのです。この斜面では下部にダケカンバの疎林があり、尾根にはブナ群落やオオシラビソ群落があるのですが、この斜面に接する付近（上部傾斜変換線付近）にはえていて積雪の移動に巻き込まれたものは、幹が折られておりました。チシマザサ群落のなかにヤハズハンノキが加わっておりますが、これも灌木としての株立ちになっているおかげで、雪崩の破壊力を受け流すことができるのです。

1986年の11月9日、私は若い友人達と大笠山に登りました。頂上には20cm程度の積雪がありましたが、チシマザサは雪の上にていて雪の下に横倒しになっているものはみられませんでした。このことは、チシマザサが幹の弾力を生かして、多少の雪は払いのけていることを意味します。それゆえ、チシマザサが陽の光を浴びる期間はかなり長いと考えられます。この期間のすべてが光合成が行われているかどうかは確かめられていませんが、可能性は考えられます。

雪が長期にわたって残存する雪田にはチシマザサ群落はもとより、背丈の低い型のササ群落も形成されません。ブナ林の上限付近～亜高山帯下部ではササ群落に隣接する雪田には、やや急な斜面では山地高茎草原との関連もうかがわれるカリヤスーオオコメツツジ群落など、より標高の高い平坦面ではハクサンコザクラショウジョウスゲ群集などの雪田群落が形成されます。

ササ群落の発達する南東～南西斜面は夏の季節風の風衝斜面でもあります。従来、風衝斜面といえば、南西～北西からの冬の季節風が注目されてきましたが、ブナのような夏緑広葉樹の場合はもちろん、オオシラビソのような常緑針葉樹の場合も生育期間にあたる夏（春・秋の一時期をふくむ）の季節風の風衝作用のほうが、生理生態上、影響がより重大なはずで、夏の季節風の及ぼす影響はまだ詳しくは解明されていませんが、ササ群落は、夏の高温と風がもたらす乾燥に充分耐えられるのでしょう。

手前の雪の消えた斜面にはチシマザサ群落が発達するが、ブナやオオシラビソの生育する向こうの尾根には雪が残っている（慶松平周辺）



役割

ササ群落のササ(幹)は互いに地下茎でつながっているため、土砂の移動を防げ侵食を防ぎます。このことは、土壌の流失防止にもつながります。一般にササ群落のところでは裸地に比較して土壌が腐植に富んでいますがこれはこのことと関係があるのでしょう。また、ササの属するタケ亜科はイネ科のなかでもイネ亜科についてケイ酸含有量の多い、いわゆるケイ酸植物ですので土壌に活性ケイ酸を供給し、地力を高めると考えられます。ササが占有すると、森林の更新が困難になるという見解がありますが、長くても数十年ののちには、いっせいに枯死するのでその時には良い土壌条件が準備されており、森林の形成は充分可能です。この点ではササ群落は遷移配列上、ススキ群落と同様に森林に先行する先駆植生の役割を果たします。

このことは、ブナ群落やオオシラビソ群落の林床にチシマザサがしばしば見られしかも、若い時期に勢力が強く、高木が成長してくると勢力が弱まりついには失われてしまうことからもうかがえます。

花が美しい高茎草原は侵食の活発な環境に形成されます。侵食を防止しながらお花畑を保全することは、本来矛盾した複雑で困難な技術です。ササ群落をも考慮に入れることは、白山にかぎらず、高山帯・亜高山帯の応用植生学の重要な視点と言えましょう。



雪の重みから解放されてたちあがるチシマザサ群落

由来

ブナ林域上部から亜高山帯にかけてササ群落が発達するのは白山だけではなく、隣接する飛騨高原に広く見られる現象です。特に、神通川流域の白木峰、金剛堂山、人形山などの山頂平坦面のチシマザサ群落はキャラボクをともなった、典型的なものです。このようなチシマザサ群落は、日本海沿岸の山頂部に広く認められています。種類は違いますが、中国地方ではチュウゴクザサ、四国ではイシヅチザサがこの役割を果たしています。以上はいづれもササ属ですが、屋久島ではヤダケ属のヤクシマダケです。中国大陸では、スズタケ属や*Sinarundinaria*属のもので群生して亜高山帯の山頂などを被うものが知られています。特に興味があるのは*Sinarundinaria nitida*で、モミ属の*Abies fargesii*やブナの仲間*Fagus lucida*などと混生することが記録されていることです。これは、日本のブナ林やオオシラビソ林の林床にチシマザサなどのササが入ることと平行した現象です。

チシマザサ、チマキザサなどによって代表される、ササ属はほとんど日本固有といってよく、日本列島以外では樺太、千島などに分布が限られています。ササ・タケの仲間(タケ亜科)はもともと熱帯・亜熱帯起源と考えられていますのでササ属などはもともと北上して分化をとげた一族ということになります。ササ群落の由来は、日本列島の植生の由来・分化と深いかわりがあります。

春、南風にさそわれて、雪をはねのけるチシマザサのたくましさ、遠い祖先が南からきたことを感じさせます。
(金城高等学校)

白山麓の民具教室—— 4

伊藤 常次郎

ナギガエシの儀礼(2)

ナギガエシの行事が行なわれていた所は私の出生地である旧能美郡新丸村字小原^{おはら}と隣村の旧同村字杖^{つえ}でしたが、昭和三十四年~三十七年を期して小原は湖底の運命となり、山一つ越えた杖は閉村の運命となってしまいました。

ナギガエシを行なうにあたっては、大変な多くの準備が必要とされてきたものです。一例を挙げて見ると山の神に供物として使われる大根、人参、ゴボウ、ヤマイモ、サトイモ、クリ、ヤマブドウ等はナギガエシを行なう日の直前迄に支度をしなくてはなりません。その上大根、ヤマイモ、人参等の根菜類に限っては、出来る限り多くの股状のあるものを選んで採取しなければならないので、支度の際には苦心したものです。この二股の根菜類を選ぶことは、薙畑の豊作を祈願するものです。ナギガエシの儀礼は、(1)祭壇作り(2)ソエバナ作り(3)ソナエモン(供物)(4)カンダネ(神種)(5)ヨビシ(会食)(6)年占い(7)ツトヒキ(苞引き)等の順で進行していきます。

祭壇作り

仏間の横手に隣接する奥座敷の床の間を背にして、まず祭壇の骨格となるアマボシ台を組立てます。台の上から座敷のタタミの上まで、長さ約七尺位の一石俵を垂らして、台上の中央後部にレンゲウスをのせます。次にこの白の口縁に杉皮の三尺物を立て並べ、杉皮の外側を三本のネソでねじ縛り、ヒキソとユズリハを併せます。杉皮の筒状の中にはカンダネであるキビ、ヒエ、アワを差してリンゾウを作り上げます。リンゾウの前には山の神である雌雄二頭の熊の頭骨を安置します。なお、山の神の左右にタカチョオシを配して、一段下がってソナエモンと言う具合に作り上げていきますが、ソナエモンはこのナギガエシに限って招待された客人達が、それぞれ相談しあって形状のよい野菜物を持ち寄ってきます(本誌第15巻第3号『ナギガエシの儀礼(1)』の写真参照)。

招待客が全員揃った所で、家長は式始めを告げます。そして、先づ用意して置いたオキバチを取り出し、松のジンを手にとってイロリ火から点火して、オキバチの上に乗せてアカリアゲ(燈明)を行ないます。この時祭壇の上にあるジンダイに点火します。

このアカリアゲが終ると同時に、次は客人達の血縁順に七人が持ち寄った供物をソナエモンカグ(膳)に乗せて祭壇の神前にカミシモ姿で供えます。イロリ側に控えていた女衆の客人達も、男衆と同じようにカエシダネ(返し種)を行ないます。カエシダネは五人の主婦が仏前で行ないます。これはその年の薙畑で取れたお初穂を各人が一升づつ持ち寄って、昨年神種を頂いて蒔いた稗やアワ(粟)がお陰様でこんなに沢山取らせて頂きました、どうぞ神様召し上って見て下されと、先祖に報告する意味をもっています。アカリアゲ、ソナエモン、カエシダネが終ると家長はいよいよ御神酒を山の神に上げます。



祭壇に安置された雌雄二頭の熊の頭骨

一三五(イサゴ)の役目

御神酒を山の神にささげる際に、主人の手伝い役を果たしてくるのが一三五(イサゴ)と呼ばれている十一、十三、十五、十七、十九才の五人の小娘達です。適当な年頃の娘のいない時にはこの限りではなかったろうと思われま。主人が御神酒を一三五の年長者の十九才の娘に手渡すと、その一三五は神前のタカヂョウシ(竹銚子)に注ぎ、燃えさかる松のジンの燈明の補充も行うものですが、いずれにしてもこの一三五役を勤める女衆は当日の午前中に我が身を清める作法があります。部落の北はずれ約二百米の路端にバケモン清水(ショウズ)があります。高さ九尺位の大岩石の下から湧き出る清水のことです。かかる娘達はこの清水で口をすすぎ手足を清めてから会場に出席することになっていますが、女性につきものの月やくの者にはこの清水にかかわることが戒められていました。あらたかな弘法様からさずかった清水だからとのことでありますが、悲しいことに現在ではダムの湖底に姿を消してしまいました。バケモノショウズに付て記述すれば限りない位の筆になるので紙面の都合により省略しますが、みそぎを終った娘達がこのようにして神の使者として施行家に足を運びました。

一三五娘と家長は山の神に御神酒を捧げて一石俵の上で正座して一礼二拍手をして詣るのですが、この時に参列者一同も同調して参詣します。これをもって一応山の神への儀式そのものは終ることになりますが、引き続いてご先祖に対して本日の儀の施行の報告を兼ね、来年の豊作のご加護も併せて祈願する御参りを道場主の坊さんによって行ないます。

読経が終ると同時に受け種の行事に入りますが、この時当家の主人は祭壇のリンゾウに供えられている稗と粟を抜き取って、一三五娘と来客男性の各五人に手渡します。男衆は男花と言って稗の穂を持ち、一三五達は女花である粟種の穂を手にします。この時稗粟共に一本、三本、五本、七本、九本と言うようにして、一三五娘達の最年少者である十一才の人には一本の、次の十三才の者には三本の粟と言った具合に随時末広型に持って貰って、男女一組ずつ同時に仏前に供えます。最後になってからこの稗や粟の穂を授けて、来年の薙畑の種として持って帰ることになりますが、神前にこの他に大豆、小豆等も供えられており、誰が何を授けて帰るのかと言うことをきめる為にハウビキ(宝引)を行ないます。この宝引きに先だつて、家長が座敷の中央で麻木に火を点火してその麻木の燃え残りの灰の状態を見て来年度の天候を占います。客人達はその天候を加味しながら授け種を持って帰ることになる。

ヨビシ

一連の祝儀礼が一応とどこおりなく進行して終わった時点で用意されていた会食の配膳となりますが、この会食のことをヨビシと言います。このヨビシは言うまでもなく神仏と在世の人達との共食です。かりにヨビシの献立を見るならば稗飯、大根またはアザミの味噌汁、山イモ、ゴボウ、ゼンマイ等のニシメ、大根人参のナマス、ゼンマイ、フキ等のクルミアエ等のアエモン、黒豆を煮た煮豆等ですが、これらの献立は各家によって様々なものになることは当然で、当日は多く粟餅を搗いて小豆のアンコを付けてこれらもふるまったものです。

このようにして取り行われるヨビシに係る接客人は、すべて一三五役である娘達が主役になって施主側の主婦達は補助的なものです。

ツトひき

さてこのようにして御神酒を飲んでヨビシも歓談の中に盛り上がってくる頃を見計らって、村の若者連中が数人のグループでワラやスゲ等で作ったツト入れを行ないます。ツト入れと言うものは、一口に言えば当家の繁栄を祈願することが目的の行事とされてきたものですが、これも昭和十五年頃をして影をひそめてしまいました。若い衆にして見れば何よりの楽しみの一つであるこのツト入れは、ナギガエシだけには限られず小原では結婚式等でも多く見られたものでした。往時は今と違って粗食の明け暮れの社会世相でもあったことは言うまでもなかったので、このツト入れによって施主側から貰った御馳走を食べることが若者達にとって何よりの楽しみであったことはうなづけられます。

そこでこのツトヒキの本論に入りますが、会食の真最中に入口の中戸をがらりと開けて用意して持って来たツトとダオゾ（ツトは女性を表すもの、ダオゾは男性を表現するワラ、スゲ製のもの）をオエ（居間）の中にワラ縄をつけてほおり込みます。若連中は縄の先端部に縛ってあるツトの中に早く御馳走を入れて返してくれと言う気持ちで、庭の土間で待機して縄の末端を持って待ちかまえています。その時、時期を失せずして一三五達や客人達はその縄の先についているツトと縄を力強く引いて、庭先に御馳走を待っている若連中を家の座敷の中へと引きずり込みます。この時若連中は顔に手ぬぐいでほほかむりを



ヨビシ（会食）



若連中が“タオゾ”をオエ（居間）にほおりこんだところ



“ツト”をひく娘達

して人相を判明出来ないようにしているので、座敷の中央迄引きずり込んでからその顔面の手ぬぐいを一三五達によって除去されます。ここで若い衆はひらき直ってくるので、一三五達から御神酒を受けることから始まる酒が入ってくると次はそのツト引きにと事は進みます。若連中が酒をよろこんで飲んでいる間に、当家の主婦はその投げ込まれたツトの中に酒、菓子等を一杯入れてもとの座敷の中央に戻して置きます。酒も徐々にまわってきた所で、上座の方には一三五達が五人でツトを中間にして、下座の方には若い衆が互に向かい会って共に縄を手を持ってそのツトを引き合うのがツト引きの諸作ではありますが、この時古来から唄いつがれてきたつと搦唄があります。

- 一、イサゴ見たさにヨーニ（夜荷）をおろし、月も十五夜茅穂が揺れる、招くあの女がいるかいなハ、引いた差いた差いた。
- 二、イサゴ見たけりゃナゲシの宿に、草鞋とけぬか人目のなさけ、ツトに隠れてはいりたや。
- 三、イサゴ見たさにツト入れ来たが、顔を隠して中戸を開けりや、下の婆さが邪魔になる。
- 四、イサゴア座敷で酌とりさなか、邪魔な婆さにツト投げつけりや、ゴテ（雄ヅトのこと）をこわきにカゲの間へ。
- 五、イサゴア注す酒やはたるの水か、引いて引かれる夫婦のツトは、受けて飲みほす返し酒。

このような唄に合わせながら双方の間で往復前後してのツト引きを終って、このナギガエシ儀礼を終ることになる。

ここで若い衆はそのツトの中に入っているものを持って帰って、酒や茶菓子等で楽しい一時を過ごしたものです。

以上記したことは小原に伝わって来たナギガエシ儀礼の概要ですが、私が聞き取りした老人達の話によると、江戸時代中期頃は小原に在住していた林善太夫氏によって盛大に村の行事として、しかもその会場を神社の拝殿を利用して共同主催で永い間傳承してきたことでした。しかし、江戸末期になってから善太夫氏の事情で村の行事であったナギガエシが各家庭によって行われるようになり、それも上流家庭と下層階級の者との間にこの行事の形式が異って行われるようになりました。

この異質のナギガエシについて私としては大変な興味を感じて再三古老達に話を聞いて復元して見たものでしたが、今となって見るとまだまだ聞き足りない部分が多い所に気がきました。現在ではこれらの儀礼に係ることを知っている老人は一人も生存しないことが何よりも残念なことです。

（民具研究家）

たより

恒例のようになってきましたが、一里野の「ブナオ山観察舎」での冬の自然観察会を3月5～6日に開催しました。望遠鏡によるニホンカモシカ、ニホンザルの観察や、カンジキをはいてノウサギ、テン、リスの足跡の観察を行ない、1日を楽しくすごしました。

3月23日には白山地域自然保護懇話会をセンター庁舎で開催しました。今回は、昨年の夏に当センターが行なった白山登山に関するアンケートの結果を中心に、今後の白山の利用についてご討議いただきました。このアンケートは登山計画、登山目的、施設、交通規制などについて登山者から意見を求めたもので、2800人近くの人々にご協力いただきました。アンケート結果については、いずれ本誌で紹介いたします。

白山自然保護センターでは、環境庁からの委託を受けて、昭和60年度からイヌワシとクマタカの調査に取り組んでいます。イヌワシは、以前から調査を続けてその生態はかなりわかってきており、これまでも本誌で何度か紹介してきました。クマタカはこれまでほとんど調査がなされておらず、今回の調査がはじめての本格的調査といえます。“白山のクマタカ”では、調査で明かになりつつあるクマタカの分布と行動圏について、イヌワシと比較しながら紹介しました。

古池 博氏には、“白山のササ群落”と題して、白山の植物のなかではいままでもあまり注目されていないササ群落について、その組成や立地、役割などを中心に紹介していただきました。

1号から連載してきた伊藤常次郎氏の“白山麓の民具教室”も今号が最終回となります。前号に引き続き、ナギガエシの儀礼について紹介していただきました。白山麓には、古くから伝わっている民具や生活様式などで皆さんに紹介したいことがまだまだ多くあります。またの機会を待ちたいと思います。

目 次

表紙 尾口村瀬戸の御鍋	1
白山のクマタカ	上馬 康生 2
白山のササ群落	古池 博 6
白山ろくの民具教室 4 ナギガエシの儀礼(2)	伊藤常次郎 12

はくさん 第15巻 第4号 (通巻66号)

発行日 1988年3月25日
発行者 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
〒920-23 Tel 07619-5-5321
印刷所 株式会社 橋本 確 文 堂